

新年のご挨拶

公益社団法人 熊本県精神科協会 会長 相澤明憲

平成29年を迎え、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

昨年の熊本県精神科協会を振りかえれば、なんといっても熊本地震への対応ということになります。熊本で震度7という大きな地震が起きるということを、現実性をもって心配していた人はあまりいなかったのではないかと思います。ましてそんな大きな地震が、ほぼ一日のうちに2度もあるというのは、まさに驚天動地のことでした。大きな被害を受けた病院から入院患者さんの県内外への転院を行うことになりましたが、これも想定外、しかし協会の会員病院が協力し合い、DPAT、DMAT、九精協など県内外の支援組織の援助を得て、大きな事故もなくすすめられたのは不幸中の幸いでした。また患者転院に至らないまでも、多くの病院でライフラインが障害され、診療機能に危機的状況が生じましたが、会員病院の職員の皆さんがそれぞれに使命感を持って危機対応にあたり、創意工夫を重ね、各病院間で連携を取り合うなどして、全体としては熊本県の精神科医療に大きな支障をきたさずにすみしました。このときに示された熊精協の団結力は他県に誇りうるものであると思っています。

今後には、大きな被害を受けた病院の再建、被災者・避難者に対する精神科医療支援、いつまた起きてもおかしくない大規模災害への対応準備、そして今回受けた支援へのお返しができるような、他県での災害に対する支援体制の構築等々たくさん課題が残されています。

目を日本の精神科医療に転じてみると、神奈川県障害者施設での悲惨な事件が問題となりました。犯人に措置入院歴があったことから、措置入

院制度について見直しが行われるようです。

現在、犯人の精神鑑定が行われているようですから、詳細はその結果を待たなければなりません。きわめて悲惨で重大な事件であることに間違いありませんが、一方で非常に特異な事件でもあり、この一件だけで法律や制度全体を判断するというには慎重でなければならないと思います。制度や法律は不断に見直すことが必要ですが、この事件一つに影響されて、理念のみに走った現実離れの制度改正が行われないうちが危惧しています。

長期入院精神障害者の地域移行が精神科医療の課題とされて久しく、各病院の努力でそれは徐々に進みつつあります。それに従って、年々精神科病床の利用率が低下しています。これを病床削減に結びつけようという考えもありますが、稼働していた精神科病床や経験あるスタッフは、地域の貴重な医療資源でもあります。地域の精神科に対する要請は決して減ってはならず、むしろ増大している面もたくさんあると思います。病棟の再編や機能分化など医療機能の向上を通して、地域の要請にどうこたえていくかが私たちに課せられた課題の一つであると考えます。

話は少し変わります。毎週日曜日の夜9時頃から、テレビのあるチャンネルで何とかスペシャルという番組をやっています。この番組では、いつも暗く深刻な話ばかりをやっています。この番組を見てみると、遠からず日本は老人ばかりの若者のいない国になり、経済は衰え、福祉は破綻してしまうことになっていきます。世界では、あちこちで内戦やテロが起き、とんでもない疫病がはやり、避けようのない大災害が起きることになっています。だからといって、こうしたらよいという対策を教

えてくれるわけでもない。この世はこうなってしまうのだから、覚悟せよ、あきらめよ、と言わんばかりで終わります。番組を見た私は、日曜日の夜に陰々滅々たる気分でベッドに入りますが、週の始まりから意気消沈してしまう。これは日本人のやる気をなくさせる陰謀で放送しているのではないかと疑ってしまいます。最近では、番組欄でテーマを見るだけで放送は見ないようにしました。

私は、今の世の中がそんなに悪いのだろうかと思っています。例えば、少子高齢化が大問題だと言いますが、私の若いころは人口の過剰が問題とされていました。日本は狭いので、人口密度が高すぎるなどと言われていました。人口過密が貧困や公害の原因の一つだとされていたのです。このままずっと減ったら大変だと言いますが、江戸時代の終わりごろの日本の人口は3千万人ぐらいで、それから100年ほどで1億人になった。現在減っていてもいつまた増え始めるかわかりません。人口減少の不安をことさらに叫んでいる人たちは、人口が増え始めれば、同じように「人が増えて大変だ」と言い出すのではないのでしょうか。そのころ60歳代だった平均寿命は、今は20年ぐらい延びていますが、長寿はずっと昔からの人間の願望だったはずです。国によっては平均寿命がだんだん短くなっているところもあります。でもそういう国のほうがよい、というわけはありませんね。

世界中で内戦やテロが起き、それらのニュースを見ない日のほうが少ないぐらいです。多くの難民が発生しています。貧困や公害、世界には深刻な状況に置かれている人たちがたくさんいます。しかし決して悪くなっているばかりではないのです。

以下は「国連ミレニアム開発目標報告2015」からとったものです。

- ・1990年には、開発途上国の半数に近い人口が一日1.25ドル以下で生活していた。2015年にはその割合が14%まで減少した。これは、10億人以上の人々が極度の貧困から脱却したと解釈できる。開発途上地域における栄養不良の人々の割合は、1990年からほぼ半分減少した。

- ・すべての開発途上地域は、初等、中等および高等教育における男女格差を撲滅するという目標を達成した。1990年の南アジアでは、100人の男子に比べ、74人の女子が小学校に通学していた。今日では、100人の男子と比較して103人の女子が通学している。過去20年において、174カ国のほぼ90%の女性が政治に参加する基盤を得た。
- ・1990年代初頭以降、5歳未満の幼児死亡率改善のペースは世界規模で3倍に加速している。世界における5歳未満の幼児死亡率は、1990年から2015年の間に生まれた1,000人あたり90人から43人へと、半分以下に減少した。はしかの予防接種は、2000年から2013年の間に1,560万人の死亡を防いだ。
- ・2015年には世界人口の91%が改良された飲料水源を使用しており(1990年には76%)、目標は期限である2015年の5年前に達成された。1990年以来改良された飲料水へのアクセスを得た26億人のうち、19億人が水道水へのアクセスを得た。オゾン層破壊物質は1990年以来除去・消滅されており、オゾン層は今世紀半ばまでに回復すると見込まれている。
- ・ODAが2000年から2014年の間に実質66%増加し、1,352億ドルに到達した。過去15年間(2000年から2015年)で携帯電話の契約数は7億3,800万から70億とほぼ10倍まで増加した。インターネットの普及率は2000年に世界人口の6%だったものが2015年には43%まで増加し、32億人がグローバル・ネットワークとつながった。どうでしょう。いろいろよくなっているのです。むろんまだ多くの深刻な問題があり、改善を目指すしなければならないということもわかります。またこの報告を見ると、日本がいかに恵まれているかということも認識させられます。

年末年始を迎えるころには、街や森の多くの樹々がその枝から葉を落として、寒々とした姿をさらしています。しかし、その枝の先に目を凝らすと、まだ小さいけれども確かにつぼみがついていることに気づくことができます。葉の落ちた裸

の樹を見て、寒い冬だけを感じるか、そこにつぼみを見つけて春の明るさを想像するかは、見る人の見方によるのだと思います。明るさや温かさを示唆するつぼみは、そのつもりで探せば必ずあるものです。

平成29年も協会は様々な課題に取り組まなければなりません、少しでも明るいものを見つけな

がら、前向きに活動していきたいと考えています。そしてその活動が、熊本県の精神医療福祉の発展に寄与し、会員の皆さんの医療活動の助けとなるものにしたいと思います。

新年が皆様にとりまして希望に満ちた明るい年となりますよう祈念し、ご挨拶いたします。

